

『何をしてるんだ、何を——』

『しつ、しつ、だまつとれ、いよく、こゝが目的の合流點だぞ』

『一氣に登つて、マレッツバ蕃に焼討ちを食せるんだ』

『え——』

『もう、マレッツバ蕃社の下に來たのか』

それつきり隊員は沈黙に浸つた。さらさらと頭上の崖から砂土が降つて來る。もう、先頭は登り初めたらしかつた。見すかしたが何も見ることはでさなかつた。

『注意、中腹に生蕃の陷穿と槩柴とあり』

低い聲が口から耳へと傳つて來る。

積から山肌やまはだに足あしをかけた刹那せつな、俺おれの心こころはかすかにふるへた。もし、生蕃せいばんに氣取けとられたら最後さいご削り立つた赤土あかつちらしいこの斷崖だんがを登る俺おれたちの生命せいめいは彼等かれらの思ふがまゝだ。ふとこんなことを考へると沈重ちんちゆうな氣持きもちになつてしまふ。

『加島——』



側を這ふのは永吉、體をまげて聲をかけた。

『永吉さん』

『あはて、先陣を争ふな』

『あゝ、わかつた』

それつきり砂のくづれ流れる音が無氣味にひどく、見すかすと銃を斜に負ふた戦友の黒い影はさゝがにのやうにある。股の下から何氣なく連峰を見た。ほんのりと曉の光が鋭く雲を破つてゐた。

『夜が明ける』

『夜が……』

夜の明けるのが恐ろしい俺たちは思はず叫んだ、光りは俺たちにと取つて禁物である。敵に遭遇したやうな驚きであつた。が、光は次第に打ちひろがつて来る。

俺たちが登りつゝあるこの斷崖の頂上は枯野であつた。

そこを横に縦に黒豆を撒いたやうに登つてゐる。草の露は掌に冷たくしみた。まだ、一發の銃

闇をゆく



聲も聞えなかつた。生蕃は俺たちの夜襲に気がつかないのだと思ふと、いくらか氣安さもある。やゝ、平らかなところに來た俺は、初めて中腰になつて頂上を見た。五六町さきに槩柴らしいものが横つてゐる。そして、四方には低い想思樹の木が、風にゆられて躍つてゐた。このときである。

うおツ……とも、又、ぐおうツともはつきりしない。大きな喚聲が起つた。すると、隊員の體は一齊に立つて、その槩柴に躍りかゝつた。

『そらつ』

『今だ』

あたりの戦友もはね上つた。俺も中腰に膝で歩くやうにして走つた。

そして、いつしか、その槩柴の中へ足をふみ入れ、邪魔になる枝を搦んだ。掌にねつとりとしたものがついたやうだつた、が、それに氣をとめなかつた。

『氣をつけろ』

『生蕃の奴、槩柴に糞汁をかけてゐるぞ』



『臭い……』

『畜生』

『考へやがつたな』

互ひに喚いた。

俺はふと掌を見た。掌ばかりではなかつた。服のそここゝに汚物が附着してゐる。戦友たちも糞まみれになつた。

『はッはッ』

『糞汁とは考へたな』

もう、明るくなつたあたりの、藁柴を踏み越へながら互ひに、何となしに笑つた。  
ば、ばあん——

銃聲が頂上に起つた。

『出たぞッ……』

『それと行けッ』

闇をゆく



笑ひはすぐやんた、藁柴を踏み越へてしまふと、まつしぐらに頂上へと突撃して、その枯野の中に體を打ち伏せた。土煙が頭の上に湯をまく。銃丸は呪ひのやうに低くないで落下する。

## マレッツパの交戦

高原の朝の光りの中に、かた／＼と味方の輕機關銃の乾き切つた音は快よかつた。もう、白煙の輪を低く舞してゐる。

空は曇り、草葉は露に重くたれ、それが、小銃弾の射撃の度に左右になびく、俺はもう夢中だつた。長く寝たまゝ射撃をつゞけたが、生蕃は何處から撃つてゐるのか判らなかつた。たゞ、戦友たちが銃口を向けてゐるので、その方を覗ひもせず、曳金を引いた。

『加島、掩堡を掘つたよ、まア、もぐり込んでからにしろ』

横腹をつゝいたのは永吉である。赤土を三尺ばかり掘り下げてあつた。あとさがりにその中へもぐり込んで、



『いつの間に堀つたのかい』

『外の奴が血眼になつてゐるんで、俺はもう一人身でなくなつたから、できるだけ命を大事にせにやならん。はッはッ、負傷でもしたらお濱が泣くよ』

永吉はかうした中にも、惚氣散らしてゆとりを見せる、俺は何だかつり上つた気分が落ちついて来て、銃を立てかけ煙草に火をつけた。そして、さうツと眼鏡を出してまづ地形を見た。

今、銃火を交へてゐる地點は、南と北からの溪流によつてはさまれた三角形の突角にあたり、南北の溪谷は廣く、その中央にほんのちよつぴり水が流れてゐる。これは臺灣の河川の特徴であつて、一旦、降雨があれば濁流は流域一杯にひろがり、あらゆるものを洗ひ去るのである。——その南北の溪を圍む斷層は灰色の、又は赤土の屏風のやうに切り立つたもので、森林はさうなかつた。

北方の斷崖には、俺たちより以前に前進した味方隊員の、天幕を張つて、側面から溪流越しに生蕃を砲撃し、砲聲が天地をふるはせてゐる。たつた五分前から開始したものだつた。

その砲聲は五六百米前方の、ちやうど突角の鞍部になつた森林へ炸裂してゐる——そこから



俺たちの散兵した地點まで、一條の蕃路が枯野の中にあつた。

「加島、今のうちに飯でもやらんかい」

飯行李を背中から下ろした永吉はその蓋を拂つた。この男の眞似はどうしてもできさうになかつた。俺は水筒の水だけ呑んで赤土の穴の中へ尻を据えた。

「おい、永吉さん、俺も入れてくれないかなア」

穴の椽へ、鼻赤は蒼白ませた顔をのぞかせた。實戦は初めてらしかつた。

「入れるかどうか見たらわかるぢやないか」

梅干の種子を吐き出した永吉は、一寸、上向いて

「君、この穴を基本にして堀りひろけて入れ」

「いゝんだね、いゝんだね」

鼻赤は劍を抜いて赤土を堀り初めた、俺も中から手傳つた。すると、あたりに居た戦友たちもこの穴を中心に堀りひろけた、生蕃の抵抗は豫期に反して至極緩慢だつたので、俺たちはいつしかゆつくりした氣持になれた。



『前面、鞍部に向つて前進！』

命令は傳へられた。

砲撃はやんだ。

俺たちは射撃しながら進んだ、生蕃の姿は一つも見えなかつた。鞍部の占領は容易であつた。午後二時にはそこの耕地へ完全な掩堡を築いて、甘藷の乾れた蔓をかき集めて敷いた。その上へごろりとなると、俺は深い穴の底に落ちて行くやうに、銃を抱いたまゝに眠むりに陥ちてしまつた。銃火の前にある危険も何も忘れてしまつて――

突然、大きな砲撃がした。

『あ――』

俺は飛び起きた、四方はもう眞闇で、戦友一人も居なかつた。俺は打ちすてられて、彼等のみ前進したのではなからうかと、云ひやうのない不安に打たれた。

又、砲撃がした。

這つて覗いて見ると、一町とはなれない地點に白砲を撃つてゐる戦友の、何十かの黒い影を見



て、思はず知らずに飛び出して行つた。

『加島君、よく眠むるね、もう、午前二時だぞ——南方の山上に生蕃の松明が見えたので、永吉さんが臼砲を司令部から擔いで來て撃ち初めたんだ。君は起さずに眠らせておけと云つてね』  
鼻赤は闇を指した、その山上に向つて臼砲の、のろまな丸い彈丸は、赤い火の尾を曳いて花火のやうに美しかつた。

『永吉さん——』

俺は今、雷管を調節してゐる、この親切な先輩へ、云ひやうのない親しみをこめた聲をかけた。

『眠つたね、はッはッ、飯は天幕につるしてある、腹が空いたらすぐによめて歸るから待つてろ』

駄々子をなだめる叔父さんと云つたやうな口調で永吉は聲をかけながら臼砲に彈丸を罩めた。その夜、俺たちは甘藷の乾れた蔓の中に交代で起きて見張つた。何事ももう起らなかつた。夜明方、溪の方へ水を汲みに行つた部隊附の苦力が、下顎そつくり銃丸ではね飛ばされ、血ま



みれの顔と、双手を空に打ち振り、草原を聲もなくころけ廻つた。一つそのこと殺してやりたかた。その方が本人のためにはいゝと誰れも考へはするものゝ、さうすることがどうしてできやう——急造の擔荷に乗せて、後方へ輸送する手筈がきまつたとき、もう、哀れな彼は枯草の上へ長々と伸びてしまつたきりである。

彼がマレッツパ攻撃の最初の犠牲であつた。それから毎日二三人狙撃された。夜、俺たちの掩堡に七八發の彈丸を浴びたこともある。俺たちの輿論は、この鞍部の背面にあるマレッツパ蕃社を完全に占領せぬ限りは——といふにある。しかし、その途中は珍らしくも深い森林だつた。その森林が脅威である。

『やつゝけろ』

『蕃社を焼いてしまへ』

隊員は部隊長に迫つた。

この日は、ちようど正月元旦だつた。一か八か、すべてを解決してしまひたい氣持が誰れにもあつた。毎日く二人、三人の血まみれ姿を見るのはたまらなかつたので——



『焼討ち許可だ』

『それ行けつ』

全部隊員に、正月も何もなかつた。許可があるとすぐに森林の中へ猛射を加へて前進した。生蕃の抵抗はどうしたこともなかつた。

蕃屋はその深い森林を一里も行つた草原の、南向きに建ち並んでゐる。ブタイ社のやうなスレトつくりではなく、全部、木造萱葺きだつたので、火をつけると非常によくもえた。

野も林も白煙につままれた。

俺たちはこゝに新たな掩堡を築造した。

情報があつた。生蕃たちはこゝより半里の後方の地點に密集してゐるといふ——そこまでの途中、猿の群れた森林である。

『前進！』

碧い空がかすかに森林の切れ目にのぞいた曉に、俺たちは又前進を初めた。それは蕃社を焼討ちしてから十日目の朝である。森林を通り抜けると、そこは鞍部になつた赤土の、低い想思樹



の生ふた地點だつた。

銃聲がその想思樹の中に起つた。

俺たちは赤土の上へころがつて應射した。豫期したところの生蕃の密集部隊である。今度は俺も慌てなかつた。

『やたらに前へのさばり出ると、やられるぞ』

永吉は銃を杖にして、平氣な顔をして俺の足を蹴るやうにして注意した。そこで、返事の代りに三間ばかり這ひ下がると、すぐに崖のくづれたところへ體をもたせかけた。

『さう、さうだ、さうしてる』

永吉は立ち撃ちの構へをしてる。

『永吉さん、危険だよ』

『俺にや弾丸はあたらぬ——やア、此奴泣いてやがらア』

永吉は俺のすぐ側に居る警手の背中を叩いた。この警手は警官に補助の隊員で、一部隊に四五十人は居た、その一人である。俺より三つばかり年下の、つひ、三月ほど前内地からやつて来て



奉職口がなく路頭に迷ふた揚句に、討伐隊警手募集を見て飛び込んで来た男だつた。それが泣いてゐる。

『泣く奴があるか——』

俺は其奴の背中を、いやといふほどどやしつけた。何んだかしかし可哀さうだつた。

『は、はい』

びつくりして、俺の顔を見た。

わあッ——といふ喚聲がした。ふと、頭を上げると、部隊は一齊に躍進してゐる。残されたら大變だつた。

『来い——』

俺は其奴の手を曳いて、部隊に追ひつくとそこで追ひ放した。弾丸はしゅツくと鳴つて土煙を立てる。俺はきり／＼と舞つて體の置き場に困つた。

『伏せ、伏せるんだ』

誰れかど叫んだ。



俺はその聲に初めて氣がついて、赤土の上へへたばつた。この地點から一寸も前進することはできなかつた。生蕃は突如、北方の森の中から側面攻撃を加へ初めた。俺たちはちやうど十字火を浴びてゐる。悲鳴、苦痛、呻めきが赤土の底から湧いた。

『後續部隊が來着したぞ』

『しつかりしろッ』

こんな聲が聞える。それと共に突撃に移つたが、撃ちすくめられて、また、赤土の上へ吸ひ着いてしまつた。いつしか、夕ぐれは迫つて來た。

『あ、日が——日が暮れる』

俺は云ひ知れない不安に打たれた。そして、せめて永吉でも側に居てくれたならと見廻したが影もなかつた。生蕃の銃丸は頭上低くかすめて唸る。

『それ、弾丸だ、補充弾だ』

後から誰れともなしに手渡してくれる。迫撃砲の閃光が闇に散つた。白い硝烟と土煙が低く流れる。山砲のとどろきをすぐそこに聞いた。



『掩堡を……ほ……れえ』

聲と一緒に赤土の塊がはねとんだ。闇は膏藥のやうにすべてを貼りふさぎ、それを破るものは生蕃の銃火の閃光だ。

不安な夜だ、たまらない焦燥につままれる。誰れともなしによつてたかつて堀つた掩堡の中にめぐり込むと、俺は意氣地なくその底へへたばつてしまつた。やたらに射撃しつづけた指は腫れて感覚がなくなつてゐるのに氣がついた。

『よ、よ、よッ』

何が何やら判らぬことをわめき、俺の頭上から土塊をかけてころけ込んで來た奴があつた。いきなり俺の體へしがみついて、

『あ、ふ、ふ……』

と、たゞ息を吐いた。

『しつかりしろ、やい、ど、どうしたんだい』

俺は其奴の肩を掴んだ。其奴はごくりと息を呑んで——助かつたのかなア——と又云つた。後



方から俺たちの食糧を苦力に擔がせて二町ほどの後方まで來ると、生蕃に狙撃され、やつと重圍をくゞつて俺たちの掩堡と知らず、たゞ、穴の中にころけ込んだといふのである。それで、後方との連絡も断たれてしまつたことを知つた。

銃丸は八方から飛んで來る。どつちに銃を向けていゝのか見當がつかず、終夜、まんぢりともできなかつた。

朝になつた。

森林の中で喚聲が湧いた。應援部隊が來着した——さういふさゝやきが掩堡の中に流れた。

『應援部隊？』

俺はさうツと頭をつき出して、背面の森を見ると、もう、近くに一部隊が前進しつゝある。

日章旗を打ち振つてゐるのは永吉であつた。彼は生蕃の重圍を衝いて、後方と連絡をとりに行つたのであることを知つた。しかも、その部隊は、逃げ迷ふた生蕃六人を捕虜にしてゐる。

『おゝい、永吉さん、永吉さん——』

俺は思はず叫んだ。



『やア、生きてたのか〜』

永吉は掩堡のふちへ日章旗を立て、俺の手をしつかりと握りしめた。涙がふつと瞼ににちんだ。

『どうだ、こたへたか〜しかし、もう大丈夫だよ、あの捕虜の中にはマレツパ蕃有力者が二人も居るので、これから彼奴たちを使ひ歸順をすゝめるんだ〜おい、其奴共はこゝへ投げ込んでくれ』

永吉が招くと隊員は、捕虜の生蕃を後手にいましめたまゝ、俺たちの掩堡の中へ押し込んだ。まだ、銃聲は絶えなかつた。生蕃たちは不安と憎悪と呪咀の瞳を輝かして、體と體とをこすり合せてうなだれた。そして、隙があつたら逃げようの心構へを見せてる。全線に亘つて前面の生蕃に銃火は集中された。その隙にどうしたのか繩を切つた一人の生蕃は、いきなり俺の肩を踏んで、掩堡からはね上つた。

『こん畜生』

俺は無意識にその足首を掴んだが、ほんと蹴りつけられて俺は仰向けにひつくりかへつた。生



蕃は掩堡の上に仁王立ちになつたときである。

『野郎』

永吉の聲は生蕃と組打ちされて發せられた、俺も夢中になつて掩堡の外へ飛び出すなり銃の尻で生蕃の腰へ一撃を加へると、奇妙な聲を上げて生蕃は動けなくなつた。永吉は何かぶつくと口の中で呟いて、其奴を引きくゝり、掩堡の中へころがし込んだ。生氣に返つた生蕃は、口をぱくくさせた。

空氣は息詰る位に重く、神經はやたらに昂ぶつて來る。

午後になつて、やつと生蕃を撃退することができた。捕虜の生蕃を叩き込む深い穴を掘り、その上に丸太格子の蓋をした。そんなことをしてゐるうちに又夜が來た。俺たちは緊張を通り越して、頭はボウツとぼやけ切つてしまつた。

食事の配給を受けても、それに箸をつける元氣もなく、俺は掩堡の底へへばりついてたど眠つた。

生蕃たちは朝になると、丸太格子の間から六つの首をつき出して、俺たちへ哀願の腫を投げつ



ける。

俺は彼等を憎む氣はちつともなかつた。どうしてこれを敵として見ることができやうか。

『おい』

俺はのこくと近寄つて、穴の中を覗き込んだ。そして、堅パンを一枚づゝやつた。生蕃たちはニツと笑つた。そして、何か云つたけれど俺には判らなかつた。まだ、そこ、こゝに銃聲はする。

『まだ、のこくしちや危ないぞ、這つて戻れ、馬鹿だなア、大膽でないものが、大膽ぶることが一番いけないことだ——』

永吉の呶鳴る聲に、俺はひやりとして四這ひになつた。

さやうなら

鼻赤が狙撃されて掩堡の中に擔ぎ込まれたのは今朝たつた。尻と肩とに一發づゝ食つて、赤毛



布にくるまり呻めいてゐる。蒼黒くなつた頬には涙がある、泣いてゐるらしかつた。

『おいしつかりしろ』

俺は聲をかけた。しかし、彼は眼をとちたまゝ返事をしなかつた。

『痛むか——』

負傷の經驗を持つ俺は、痛むことより死の恐怖の強かつたことを思ひうかべた——掩堡の外では彼を後送する擔荷を戦友たちは造つてゐる。

いくら呼びかけても、鼻赤は頭を外套の枕へのせ涙ばかり流してゐる。何か云ひたいのだらう。父のことか、戀人のことか——かすかに眼を開けた。尻の傷は大したことではなかつたが、肩の方は或は肺にかゝつては居なからうかと永吉も案じてゐる。出血はひどかつた。

鼻赤は——楠田は今たつた一人で、肉親の看護も受けず、二十八年の生涯を今冷たい掩堡の中で終るかも知れないのだ。それを思ふて彼は泣いてゐるらしい。それは俺にもよく判る——俺はブタイ社の夜、僅かな負傷にも泣いた。

『楠田——』

さやうなら



永吉は覗き込んだ。

鼻赤は空虚になつた目を大きく睜り、口をもがくさせ左手をやたらに振つた。そしてしゅつと息を吹き初めた。

『や』

『しつかりしろ』

戦友たちは八方から聲をかけた。しかし、その聲で彼の魂を呼び戻すことはできなかつた。咽喉をごろりと鳴らして、ふうつと大きな息を吐いた。それつきりである。

『たうとう死んだ』

『楠田——』

皆な掩堡の中に坐つた。

夜になつた。風は掩堡の中にも泣いた。警戒の銃聲はひゞく。

俺は何だかうら淋しいものにつままれて、掩堡へよりかゝつた。天幕の外では永吉たちが火を焚き、小さな薬罐で茶を湧かしてゐた。



『加島、今すぐに茶が湧く、飯を食ふなら待つてろ』  
双手を尻に廻した永吉は、足で薪をくるりとかへして顔を向けた。

『あゝ』

『ときに俺はお濱に會ひたくなつたよ、手紙を受取ることができないので、さつぱり様子が判らぬが……』

『俺も——』

危く口まで出た聲を俺は呑み下して、そこに美津子の倂を描いた。それに二重にうき上つたのが幸子である——美津子の唇の味は胸に迫つて湧いて来る。幸子の瞳が小羊のやうにそゝがれる、——俺は思はずその幻影を双手にしつかりと抱きしめた。本當に彼女たちの懐へ歸りたくつた。外に何の望みもなかつた。

『女——女の肌はいゝなア』

誰れか嘆きに近い聲で云つた。

『そんなことア云ふなよ』

さやうなら



舌鼓打つ音がする。それより皆な沈黙に浸つた。女を思ふ各々の胸は、任地に残した妻か子の上に走つて行くらしかつた。俺はたまらなくなつて、焚火のそばに進み、そこで二人の女に手紙を書いた。

翌る朝になると俺たち部隊には、後方から新たな應援隊員がやつて來た。それが負傷者、戦死者以上の人員だつた。新たな市街地の話を聞くのや、彼等の携へて來た干瓢、椎茸、奈良漬、干魚などが俺たちにとつて何よりの土産である。その中に益子といふ新隊員は干うどんを持つてゐた。

『御馳走しろ』

『すばらしいものを持つてやがるな』

俺たちは咽喉を鳴らした。

『御馳走しやう、嬢が任地を立つとき入れてくれたんだよ。嬢がね』

益子はブリキ罐の蓋を開けた。掴み出されたる二把のうどんは、すぐに洗面器の中で茹でられて、生味噌をかき廻してほんの一口づゝ啜つた。

俺は口のほとりに残つたうどんの香をペロリと甜めて、ほんやりしてしまつた。永吉は俺を見



『何をほんやりしてるんだ？』

『平地が戀しくなつたんだがね』

『討伐中は辭職は許されはしないぞ』

『さうだなア』

『まだ、討伐はつどかう、なるだけ狙撃を受けないやうにしてることだな。それより外にないさ』

俺の心のうへには憂鬱と狂燥が漂ふた。そして、赤土の上に低く茂つた想思樹が夕闇につまみれるのを見ながら、兄の上をも思ひ偲んだ。

夜、夢に美津子がこの戦線へ迎ひにやつて來たのを見た。すべてが感傷の旋律である。俺は夜が明けても、幻の中に立つてゐるやうにあつた。

朝の風は流石に身にしみた。

『おい、炊事班に何かをせしめに行かう。來いよ』

永吉は銃を肩にかけた、俺と益子はこの聲につれられてふいと立つた。危険の中に身をさらす

さやうなら



ことは、何も彼も忘れさせてくれる気がしたので。

焼けた蕃社まで来たこのあたりは、立派な道路が味方の手によつて開かれ、三四町の間隔に掩堡があり、輸送路の警戒をしてゐる。

まるきり雨といふものが降らないので、地面は乾き切り、白い土埃は道に沿ふて茂つた木や草の葉を埋めてゐる。蕃社を通り抜けると、そこは前方の見透しの利かない雑木林になつてゐた。

俺たちは話しながら、そこを歩いてゐると、左側のやゝ深い谷から、ぱ、ぱんと二發の銃聲が起つた。

『そらッ！』

本能的に俺は道に打ち伏した。

『畜生、やりやがつたな、俺を——俺をやつたな』

喚めくのは永吉である。見ると左肩を撃たれてゐた。それにもかまはず彼は立つたまゝ谷へ射撃を加へた。

附近の掩堡から隊員は駈けつけた。そして何か喚めく永吉を無理に射撃をやめさせ、繃帯して



やつた。

『俺が撃たれる——負傷するといふことはあられぬことだ』

齒をむき出して永吉は谷を睨んだ。ひどく自信を傷つけられたことが憤りのもとであるらしかった。まだ射撃をつゞけやうとする、俺はその手を押さへて、

『永吉さん——そ、そんなことをしちやいかぬ』

と、ある笑へない気持ちで聲をかけた、永吉は首を横に振つた。

『俺はなア——日露戦争のときだつて、かすり傷一つ受けなかつたんだ。その名譽ある俺が生蕃にやられるなんて、畜生、痛かアないぞ。撃つ、撃つ』

頑張つた。俺はこの妙な理屈を云ひ破る言葉を見つけ出すことができなかつた。

谷の赤土の斜面には、生蕃の走る姿が見える。逃げるのではなかつた。彼等も又襲撃の氣勢を見せてるる。

『面倒臭い、俺は迫撃砲か機關銃を擔いで来るぞウツ』

永吉は小銃をすて、部隊の方へと走り出した。その肩の出血ははけしかつた。それを追ふて俺



は引止めたが聞き入れない。——永吉が大きな蛇木の下を駈けすぎる刹那、投げ出されたやうに横へよろめいた。

『永吉さん』

俺はやつと抱きとめた。

『また、また、やられたんだ』

『え？』

『足を——右の腿だ、畜生』

永吉は横に自分で體をころがした。俺は這つて繃帯してやると、彼は立たうとしたがもう立てなかつた。血は乾いた白い道を赤く染めた。

『さア』

『俺は背を向けた。』

永吉は手を振つた。そして、俺の銃を取らうとした。まだ、戦ふつもりらしかつた。

『やられたのか』



降る銃丸の下を盆子は這つて來た。

『やられたが大丈夫だぞ、見、見ておれ』

俺の銃を杖にして、よろめき立つた永吉は蛇木の幹に體をもたせかけて、

『俺が負傷する、ぞ、そんなことがあるものか』

いきなり銃の覗ひを定め曳金を引いた。俺はそこへ坐つて、ほんやり彼を見仰いだ。

『加島、やられたのか』

『しつかりしろ、しつかり』

部隊員が駈けつけると、ほんやり坐つた俺を圍んで聲をかけた。

『俺ぢやアないんだ、永吉さんだ、永吉さんだよ、銃をまき上げられたので、しかたなしに見物してらんだ』

『永吉——永吉——』

『おい、やめろ、永吉さん』

八方から彼の無茶をやめさせようと聲をかけた。永吉はひどく疲れたらしく、このときぐちや

さやうなら



りと芝生の上うへに腰こしをすへてしまつた。

やがて、赤松あかまつの根元ねもとまで無言むごんに退きしりぞ、そこで水筒すゐとうの水みづをのんで、

「加島——」

「？」

「銃じゆうを返かへすぞ」

「たうとう、同任地どうにんちから來た連中れんちゆうはやらられて、俺おれひとり一人ひとりになつてしまつたなア」

俺おれはつひ口くちにした。

「煙草たばこに火ひをつけてくれ」

彼かれは左ひだりの手てはもう動うごかなかつた。俺おれは云いふがまゝに火ひをつけてやつた。もう、銃じゆうをとつて戦たたかふ

氣きはなかつた。など、かなしかつた。淋さびしかつた。

わあッ——

とすすまじい喚聲くわんせいが森林しんりんの中なかにゆれた。

味方みかたはひどく混亂こんらんした。銃丸じゆうぐらんは八方はうから落下らくかして來る。俺おれは思おもはず中腰ちゆうこしになつた。赤裸あかはだかの生蕃せいばん



は一團となつて、二町ばかりの道にあつた隊員の中へ、槍をひらめかして突撃するのを見た。それと同時に後方でも、すぐ近くに悲鳴が湧いた。そこには肉迫戦は開始されるのである。大地は急に斜に傾いて、大きく左右にゆれた。俺はよろめき立つた。剣を抜いた、何か眞黒なものが眼をさへぎつた。右手は自然に横におどつた。

『永吉さん——』

無意識に叫んだ。

『加島——加島、さ、さやうならだぞ、さやうならだぞ——』  
聲が砂煙の旋風に打ち消された。

『俺もさやうならだ、何も彼もにさやうならだ』  
俺は、味方が、——敵が何處に居るのか見えなかつた。

の影である。體と手とがたど輪を描いてとんだ。砂煙の中におどるものは、すべて恐怖  
『加……じ……まア』

さやうなら



さやうなら

永吉ながよしの聲こゑが、かすかにどこかで聞きこえる。







蘆谷 蘆村 著

談奇 巡禮 妬

婦 傳

本書は妬婦傳とその女夫篇たる妬夫傳から成つてゐて登場人物は古今東西歴史上の大立物。夫等の人物が人生に於ける暴風雨——性的生活の嫉妬に遭遇して如何に悩み如何に消えて行つたかを著者獨書で鋭いメスに依て剔抉した男女裏面生活の貴重なやきもちの研究である。

四六判三五〇頁上製 再版 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

三浦 義臣 譯

支那 小説 封

神 傳

支那の古代に生起した數々の奇怪な事象は東洋各國に多くの傳説や綺譚の種を蒔いた。本書は此の神秘幻想の支那古代に於ける三つ的人物——酒池肉林の宴に酔ふ殷の紂王と人血を吸ふ妖精姐妃と彼等を討つて民苦を救つた周の武王——の争鬪史を刻明に描出した名著の譯書である。

四六判三五〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢

ヘゲデユス 作 角岡 知良 譯

戯曲 殺人 犯

「殺人犯」はハンガリーの大文豪ヘゲデユスの大傑作で作風には東洋殊に日本の古典藝術と一脉相通するものがある。譯者は亦ヘゲデユス及びその國情を最もよく理解した人、或は原作以上の藝術的命を吾人の胸に躍動させてくれるであらう。

四六判二五〇頁美本 三版 定價 壹 圓 送料六錢

豊島 與志雄 著

創作集 道 化 役

収録された創作「道化役」以下「女客一週間」「千代次の驚き」「別れの辭」等十餘篇は數ある氏の創作中でも不朽の名短篇に屬するが而も其等が自らの長篇を構成してゐる。又「椎の木」は之等と異き方を異にした香り高き逸品で共に佛蘭西文學の流を汲む氏の面目を現して遺憾がない。

四六判三五〇頁美本 二版 特價壹圓四拾錢 送料一〇錢

大井 廣 著

歌集 悲 心 抄

若くして其閃きを謳はれたる天才歌人が今や人の子の親となつてその作風に如何なる進展を見せたか、いとし兒の夭折に直面して快慟を續けた作者の悲心はやがてその詩囊の瀾熟を助け凝て本歌集となつた。一首毎に見る情熱の深刻さは恐らく啄木以上であらう。

四六判三〇〇頁上製 新刊 定價壹圓五〇錢 送料一〇錢















LC ACQUISITIONS



0 030 471 082 2

*1949*

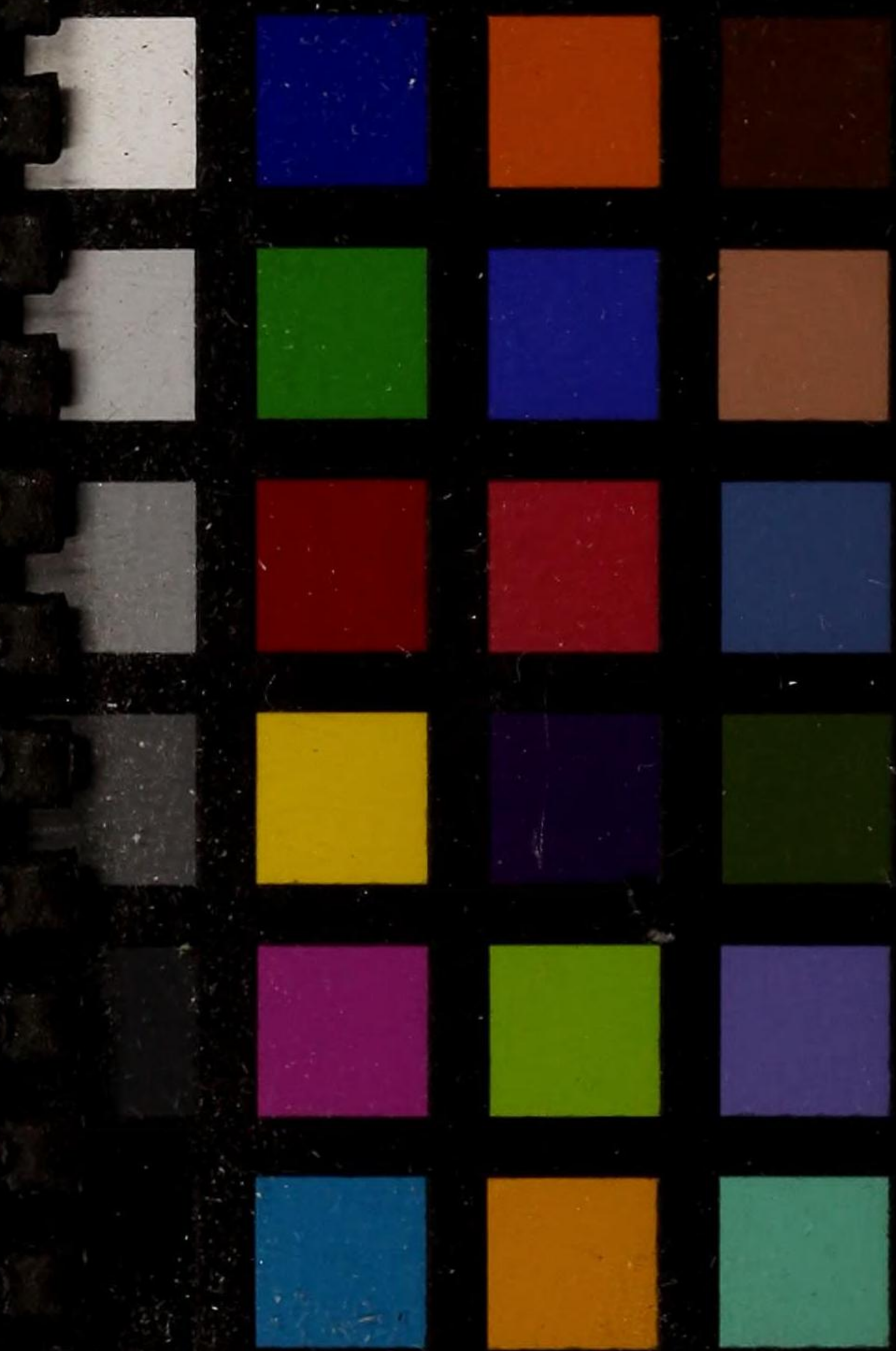
*SP 15037*

*1*

*1*

*W/H*





Japan	2/14/13	288		00304710822
-------	---------	-----	--	-------------

arutobatsutai n n 0 0 8 8 0 0

